陽菜とイヌネのラブハメエステ

Hina & Inune's Love Hame Esthetic

小説 高岡智空　挿絵 魁李

立ち読み版

第一章　小悪魔ママの甘い誘惑　006
第二章　背徳エッチとチェリー摘み　067
第三章　時谷流、性感エステマッサージ　105
第四章　サロン・ド・サリュービル、真の研修　168
第五章　幼なじみ母娘のあまとろエッチ　212
エピローグ　263

登場人物紹介

Characters

時谷陽菜（ときたにひな）

紀人が家庭教師を務める幼なじみの少女。ちょっぴり天然で子供っぽいところも。しかしむっちり巨乳ボディーは大人のもの。

時谷絢音（ときたにあやね）

陽菜の母。陽菜を女手一つで育てている。母性溢れるふんわり系の身体＆性格で、マッサージ店のオーナーも務める。

久間紀人（ひさまのりと）

陽菜のことを妹のように思って接してきたが、最近だんだんと好意が強くなってきて……。

ペニスが擦れる性的快感、乳房を押しつけられる精神的な快感、そして巧みな手技で身も心も蕩かされる肉体的な快感――そのすべてに腰を躍らせ、肉棒を激しく跳ね震わせ、恥ずかしい喘ぎをもらしながらも、紀人は懸命に射精をこらえ続ける。

「ふぐぅぅっ……あぅっ、んっ……んはぁぁっ……」

なにも考えられないほど、頭の奥まで真っ白にし、どのくらい時間が経ったのか――永遠に続くように感じられた苦悶と至福の時間が、彼女の声でようやく終わりを告げた。

「はい、お疲れ様でした。これで脚の筋肉もバッチリほぐれたわよ♪」

絢音の豊満な乳谷間で擦られた両脚が解放され、身体が揺れるたびに、ブルブルと振られていた勃起の傍からも、指が遠のいてゆく。その状態で紀人は、僅かに腰を浮かせてお尻を突きだした、なんとも恥ずかしい体勢になっているものの、どうにか射精にだけは至らず、荒い息を吐いてベッドに突っ伏していた。

（はぁっ、はぁぁ……気持ち、よかったぁ……あぐっ、おっ、で……出そうっ……）

ブルルッと腰が震えた瞬間、括約筋を締めつけて射精欲を押し殺す。しかし先走りはオイルと混じり合って紙下着をドロドロにし、股間でいきり立つ勃起をグチャグチャに濡らし汚して、ジッとしているだけでも多大な刺激を与えてきた。

（い、急いでトイレに――そこで抜いてから、着替えようっ……）

絢音の前で無様を晒さないようにと、紀人はそう考えて震える手をつき、身体を起こそうとする。しかしそこへ、絢音はまたしても、容赦ないひと言を告げた。

「それじゃ、次は仰向けになってちょうだいね？　紀人くんの逞しい身体、真正面からトロトロにほぐしてあげるから♥」

「なっ――ぁ……あ、のっ……ま、待ってくださいっ、あや――あぁっ！」

絶句し、それでもなんとか彼女の名を呼ぼうとするも、絢音は無言になっていた紀人の身体を簡単に転がして、ベッドの上で仰向けに寝かせる。そのためのオイルでもあったのかと気づかされながら、紀人はとうとう、問題の部分を彼女の眼前に晒してしまった。

「はい、それじゃ――って……えっ……」

羞恥に襲われた紀人の顔が、一瞬にして真っ赤に染まる。

（うわああぁぁぁぁっっっ！　さ、最悪っ、こんなっ……）

彼女の視線が下腹部へ、そして股間に向けられ停止した。それを見た紀人はたまらず顔を隠して、足腰を捩り、絢音の視線から逃れようと身悶える。

けれど、その絢音は瞳を丸く見開いたものの、すぐさまいつもの――柔らかく慈愛に満ちた表情を浮かべ、落ち着いた口調で声をかけた。

「――大丈夫よ、紀人くん。女の人でもね、マッサージで濡れちゃったりとか、あるものだから……男の人が勃起しちゃっても、仕方ないことなのよ」

「で、でも、僕っ……こんな、絢音さんの前でっ……なんてっ……」

その優しさが逆に痛く、両腕で顔を隠したまま顔を背けて声を詰まらせる。すると絢音は、一度ベッドから降りて紀人の頭の傍に立ち、優しく頭を撫でてくれた。

「大丈夫よ、むしろ……そんなに気持ちよかったんだって、おばさん嬉しいくらいなんだから、ね？　おばさんは気にしないから、このままマッサージ続けましょう？」
腕の隙間から彼女の優しい笑みが覗いて、少しだけ気持ちが楽になる。
（……そう、か……そうだよね、だって絢音さんは仕事でしてるんだから……あんなに気持ちいいのに、反応するのが僕だけなんてことないだろうし、慣れてるんだ……）
紀人が小さく頷き、開き直って横になると、絢音は小さなタオルを紀人の顔にかけて、再びベッドに上がった。そして、次の瞬間――。
（――いや……いやいやいやいやっ、ええええぇぇぇ――っっっ!?）
「それじゃ――えっと、擦っちゃったら申し訳ないもの。特別に、ここからのマッサージは、さっきと反対の姿勢で進めるわね。これなら、ずっと紀人くんの……男の子の部分、見ててあげられるから……触っちゃったりしないし、安心でしょう？」
彼女の膝は、紀人の頭の両側に置かれていた。
そしてお尻は顔の上にある――というのが、気配で感じられる。その状態で身体と腕を伸ばして胸板やお腹にマッサージするようだが、それは紀人にとっては、身体を弄られながら、顔の前でヒップダンスを見せられることにほかならない。
「ま、ままっ、待ってくださ――」
「じゃ、始めるわね？　よい、しょっと……んしょっ、んっっ……」
制止する間もなく、彼女のお尻が揺れ始め、オイルと指先による心地よい刺激が胸元を

伝い、男女問わない人体の性感帯である乳首の先端へ、引っ掻くような甘い刺激がビリリッと伝わりだしていた。

「はぁ……やっぱり硬いわね、紀人くんの胸板……服を着てると細く見えるのに、とっても逞しいわ……ふふっ、この奥までしっかりほぐしてあげないとね」

手の平を広げた指先が、グッグッと強く胸筋を圧迫しながら、女性の乳房をそうするような手つきで、緩やかに揉みしだく動きを見せつける。感じたことのない刺激、されたことなどあるはずもないタッチに、紀人は股間を大きく跳ねさせて腰を捩り、筋肉を弄られながら、荒い吐息をもらしてしまった。

（ちょっ……んっくぅぅっっ！　これは、やばいっ……ってぇぇぇっ、本当やばい！）

さらには、数回のお尻の移動で擦られたせいで、紀人の顔にかかったタオルはあっさりと剥がれてしまう。ガーターベルトとストッキングで飾られた肉感的な白い太もも、黒いタイトミニスカートに包まれた肉厚ヒップが眼前に押しつけられ、施術で流れた彼女の汗の甘酸っぱい匂いが、顔を包み込むように漂い始める。

しかもスカートは動くたびにずり上がり、そこから覗くショーツも、紀人の牡欲をこれでもかと刺激してきた。すでに射精寸前なほど追い詰められていた肉棒は、視界に訴える誘惑で瞬く間に反応を示し、乳首や下腹部を手の平で撫でられるたびに、お尻の奥がビリビリと痺れだして、せり上がる快感とともに尿道がわななきだすのを感じる。

（あぐっっ……だ、めっ、こんなっ……これ、もう無理っっ……絶対、無理ですっ！）

限界を超える甘い刺激に下半身が弛緩し、四肢の末端が痛いほど痺れて、紀人はもはや抵抗を放棄していた。その目の前でいやらしくヒップをくねらせて、紀人の筋肉質な身体を遠慮もなく撫で回していた絢音が、艶めかしい声で告げる。

「こーら、さっきから暴れすぎよ？　おとなしくしてね、暴れん坊さん？」

クスクスと笑いながら、彼女の視線は紀人の股間を見つめているのだろう。広がった指が勃起の根元に寄り、股関節を優しく撫でた。それだけで精液がもれでてしまいそうなほど、凄まじい快感が迸って、下着の中でペニスが跳ねる。

「あぅぅっっ！　んっ、くあぁぁっ……はぁっ、そ、んなぁ……」

「あらあら、可愛い声だしちゃって……だけど、まさかイッたりしないでしょう？」

この程度の刺激で――とでも言わんばかりに、彼女の手は足の付け根と胸元の両方へ這い、ローションオイルを肌に染み込ませ、それを潤滑油に指先で円を描く。

すでに紀人の乳首は痛いくらいに膨らんでおり、勃起の先からは、絶え間なく先走り汁が滲み流れて、紙下着の中はグチョグチョになっていた。それは絢音にもわかっているはずなのに、オイルのせいだとでも思っているのか、紀人が限界を迎えて悶えていることにも気づいた素振りは見せず、指先でひたすら、紀人の筋肉と官能を弄ぶ。

「こんなの、挿れた刺激に比べたらなんでもないだろうから……こんな簡単にイッちゃえるなんて、童貞の子ぐらいだと思うし――まさか、そこまで早漏くんでもないわよね？」

（――あっ、あぁぁっ……ごめんなさいっ、早漏の童貞で、ごめんなさいいいっ！）

彼女にとっては冗談めかした、緊張をほぐすような言葉だったのだろう。けれど紀人にとっては、早漏も童貞も事実。その言葉は、経験豊富な年上のお姉さんからの、嘲りを含んだ挑発にしか聞こえなかった。意地悪い響きの言葉に耳朶を震えさせられ、紀人は腰を大きく跳ね上げる。

「あっ、こらこら。だから、暴れないで、じーっとしてなさい♪」

「ぅ――ぁっ、やっ……ま、待って――うぐっっ……」

そんな少年の反応を抑えるように、絢音がゆっくりと腰を下ろして、ムッチリとした尻房が顔に迫ってきた。座り込むわけではないが、汗の匂いが顔を包み込み、股間から漂う女そのものの香りが、鼻腔に吸い込まれてゆく。

（あっ、うっっ……こ、これ――）

開かれた脚と、捲れたスカート。その奥には、肌を艶やかに見せるストッキングとショーツ、そこに浮かび上がった卑猥な膨らみと、刻まれた筋の形を目にした瞬間――。

「すいまっ、せっっ……んぁぁっっ！　んっっっくあぁぁぁぁぁ――っっ！」

紀人はそのまま、触れられてもいないのに肉棒を弾けさせ、牡としての屈服の証を、大量に紙下着の中へとブチ撒けさせられてしまう。

――ビュルビュルビュルゥゥ～～～～ッッッ！　ビクビクッ、ドビュルゥゥッ！

「え――あっ、やっ、嘘っっ……の、紀人くんっ!?」

間近で嗅いだ牝の匂い、眼前に迫った女そのものの魅力、そして戸惑うような絢音の声

さえも官能刺激となった。得も知れぬほどの快感を、たっぷりと味わいながら――焦らされきった牡欲の塊を、濃厚な栗の花臭とともに一気に溢れさせる。

動きの止まった彼女が、それを間近で見つめているという想像。そして、目の前で捲り返ったスカートと、その奥の尻房といやらしい下着。それらをオカズにして、紀人は一生モノの醜態を晒しながら、とてつもない快感に全身を弛緩させてしまっていた。

（はぁっ、あぁぁぁ……やっ、ちゃったぁぁ……けど、すっごぉ……うぅっ……）

両手両足の指を伸ばしきり、身体は丸めて引き締める。括約筋が何度も収縮して射精を促し、下着の中に白濁を流し込んでゆく。十秒以上に及んだ長い射精快楽に身を委ねながら、最後には腰をグラインドさせてまで、ようやく紀人は牡欲の解放を終わらせた。

「はっ……はぁっ……あぁ……うっ、はぁぁぁ……」

これから起こるであろう彼女の慰め、けれども心の中で感じるであろう自分への侮蔑と嘲笑、そして後処理への気まずさ――すべてを考えると、心が暗鬱としてくる。

「す……い、ませんっ、絢音さっ……すいませんっ……」

思わず声を震わせて、そんな謝罪を口にする紀人。一時の快感にすべてを委ね、幼なじみの母親との関係に、深い溝を作ってしまった。後悔が込み上げて、心がジクジクと痛みを発する。そんな紀人の声を聞いた絢音は、ようやく我に返ったようにハッと表情を引き締めて、慌ててベッドから降り、タオルを手にした。

「こ、こっちこそごめんね、紀人くん！　ついボーッとして……す、すぐに拭いてあげる

からっ……あっ……れ……こ、これって……」
そう言って汚れた紙下着を脱がそうとし、絢音は再び動きを止めた。それもそのはず、紙下着はいまだに膨らみを保ったまま、牡欲を訴えるように何度も跳ね震えている。下着の中では、いまだ萎えない肉棒が尿道に残っていた精残滓をビュグッと噴き上げて、外からはっきりと見えるような、恥ずかしい染みを広げていたのだから。
「っっ……ねぇ、紀人くん――」
「すいませんっ……僕、自分で拭きますから……ティッシュ、貸してください……」
がっくりと項垂れたまま身体を起こして、紀人はそう言うのがやっとだった。完全に軽蔑された、もう家庭教師もやめさせられるかもしれない、それを知って陽菜はどう思うだろうか、彼女にもすべて説明するのだろうか――色々な不安が頭をよぎり、怖さに背筋が震えてしまう。けれど――。
「紀人くん、あのね……その、気にしちゃだめよ?」
そんな不安は――。
「若いんだもの、これくらい当然よ……それでね? もしよかったら、だけど――」
次の絢音の言葉で、完全に払拭された。
「もう少し、紀人くんが満足するまで……おばさんが、抜いてあげましょうか?」
不意にかけられたその言葉の意味が、しばらく理解できなかった。
「なっ、そ……えっ……え、えぇぇぇっ!」

先走りとオイルが絡みついて泡立ち、クチュクチュと音を立てて肉棒が扱かれ、快楽の波に満たされた。しかも彼女の指摘――絢音への憧れも、そのせいか彼女の身体が陽菜よりも魅力的に見えてしまうことも事実なだけに、激しい興奮が先走りを溢れさせる。
「ん～？　この反応は、そうです～ってことかしら、とっても嬉しいわ。色々と提供してあげた甲斐も、あったってことだし……ほんと、紀人くんったらド変態♪」
レロレロと舌先に尻穴を穿られ、握られたままのペニスがビクゥッと大きく跳ねた。
「この前もそうでしょう？　紀人くんがシャワー浴びたとき、下着を見えるように置いてたの……気づいてくれたわよね？　一日穿いてた私の匂い、どうだった？」
「あふぅぅぅっ……あ、あぁぁっ、あれ、わ……わざ、とぉっ……んぐぅぅっ！」
わざわざオカズの提供をされていたという事実、そしてそれに乗せられて、あのいやらしいデザインや匂いを思いだして自慰を繰り返し、一晩で三回も射精してしまった記憶――すべてがグルグルと頭の中を巡り、羞恥で顔から火が出る思いだった。
「んふっ、わっかりやすぅい……こんなにオチンポ暴れさせて、タマタマの根元ヒクヒクさせてたら、その通りです～って自白してるのと同じよぉ？　ほぉら、正直に言っちゃいなさい♪　おばさんの脱ぎたて下着思いだして、何回シコったの？」
「くぁっふぅぅぅっ！　んぁぁっ、さんっ、かいっ……三回イキましたぁっ！」
「それは一日でしょう？　今日まで日数あったんだもの……それだけで済むわけないわよねぇ？　さ、ドピュッた回数のトータル、正直に教えなさい！」

曲がった舌先が菊皺の裏側を引っ掻き、尻穴に引っかけて捲るような動きを繰り返し、リズミカルな手コキを浴びせられる。けれどイキそうになると絶妙なタイミングで刺激を中断され、紀人の心は絶頂を餌に、完全に絢音の思うままに操られていた。

「はぁぁっっ！　あの日っ、三回でぇぇっ！　次っ、昨日ぉぉっっ！　昨日っ、五回っっ……いやっ、六回ですっ！　絢音さんのパンティで、オナニーしましたぁっ！」

恥ずかしい告白をすると、絶頂に向けての快感がたっぷりと与えられる。その快感に頭の奥が痺れっ放しになり、紀人の四つん這いはますますお尻を掲げた、情けないケダモノのような格好に近づいてゆく。

（おっ、ああっ、はぁぁぁっ……こ、こんなの、耐えられないぃぃっ……おかひくっ、なっ……ないっ、そぉぉっ……あおぉぉっっ！）

射精のような勢いで先走りが散り、それを絡めた絢音の手の平が亀頭を揉みしだいて、はち切れそうなほど膨らんだペニスを、激しく扱き立てた。

「あっは♪　すごいわねぇ、若いって……有り余るスタミナ、ぜ～んぶザーメンにしてドピュッちゃったんだ。それで今日も、さっきたっぷりだして――しかも、ま～だこんなにギンギンッ♥　イキ足りないのね、物足りないのねぇっ……」

「あぁぁっっ、そうっ、そうですぅぅぅ……あぁぁっ、気持ちいぃぃっ……」

菊皺がジュルジュルと音高く吸い上げられ、搾精手コキの動きが速くなり、ため息とともに快楽を訴える。彼女が唇を離しても、もはや肛門は締まりを失ったかのように緩んで

ポッカリと口を開き、女性器を思わせるほどにヒクついてしまっていた。
「まったく、これじゃ安心して、紀人くんに陽菜のこと任せておけないかしら……母親としては、娘の傍に肉食獣を置いておけないものねぇ？」
「やっ、えぇぇっ！　で、でも、そんな……そんなのっ……」
危惧していた絢音の不安を耳に、取り乱した声を上げると、そんな反応が返ってくると見越していたかのように、またも熟女のクスクス笑いが下腹部に染み込んできた。
「あんっ、誤解しちゃダメ……ふふっ、いまのはね……それだったら私が、紀人くんの性欲管理してあげるっていう、こ・と♥　嬉しいわよねぇ？　ショーツなんかじゃなくて、それで想像してた私のオマ〇コ……使えるかもしれないのよぉ？」
「あうぅぅっ⁉　絢音、さっ……それ、イクッ、もうイクぅぅっ！　くあぁぁっ！」
グチュグチュと音を立てて粘液を絡められ、ペニスをもぎ取らんばかりの激しい動きで、根元から亀頭までが捏ね回され、扱き抜かれてしまう。ついにイカせてもらえるかと全身を弛緩させるが、そこで動きを止められ、またも生殺しにされた切なさが込み上げた。
「はぁうううっ……あ、絢音、さんっ……もう少しぃっ……」
「んふぅっ……絢音とオマ〇コしたいです、って……言ったら、イカせたげるぅ……」
握るのでもリングでもなく、亀頭を手の平に擦りつけながら五本の指で肉幹が摘まれ、その指先だけでユルユルとペニスを擦られ、撫でられてゆく。もうひと擦りでもしてくれれば射精できるのに、どうしても動くことができない。

「あ、あぁぁっ、絢音さぁんっ……んぐっ、んくぅぅぅっ……」
「ほらぁ、ちゃんと言ってくれたらぁ……気持ちよ～く、ドピュッてできるわよぉ？」
（い、えば……イケるっ、だせるんだぁっ……んくっ、ふぅぅっっ……）
もし自分で動いて最後のひと押しを得たところで、その射精を彼女の手コキは手伝ってくれないだろう。これだけの凄まじい快感を注がれ、フィニッシュだけがオナニーと変わらない射精になってしまうなど、滾りに滾った牡欲が容認できるはずもなかった。
「し、たいっ……です……僕っ、絢音さんとっ……んっ、あぁぁ……絢音さんと――」
「うん、うん……なぁに、紀人くん？」
焦れた射精欲求が紀人の脳髄を痺れさせ、唇を開かせ、その宣言を口にさせる。
「絢音さんと、したいですっ！　セックスしたいっ、オマ〇コしたいですぅっっ！」
「……っっ……あーあ、言っちゃったわね♪　紀人くんったらぁ、ふふっ……好きなコのお母さんと、セックスしたいだなんて……本能に忠実な、ドスケベさんっ♥」
その声の調子は、明らかにいままでの絢音とは違っていた。年下の少年を性技で骨抜きにし、娘よりも魅力的だと、セックスの――子作りの対象として見ていると、抱きたいと宣言させたことで、非常に興奮しているようだった。女のプライドを満たされた悦びで、蕩けるように熱っぽい響きを孕んでいる。
「――いいわよ、紀人くん。そのまま何回も言って、言い続けてっ……その間だけ、いっぱいシコシコしてあげるわ。おばさんの手マ〇コを、オマ〇コだと思って――セックスお

ねだりしながら、ここに思いっきり膣内射精しちゃいなさいっ！」
「んぐぅぅっ、くあぁぁっっっ！　絢音、さっ……あぁっっ！　したいっ、絢音さんとしたいっ、オマ〇コしたいですっ、させてっっ……あぁっ、気持ちいいですっっ！」
　チュコチュコッ、ジュクジュクッ、グチュグチュッッと卑猥な粘水音がこれでもかと響き渡り、激しい手コキ刺激が肉棒を包んで射精を促してゆく。命令を言い放った熟女の唇はそのまま紀人の肛門へ吸いつき、指のように自在に蠢く舌が、背徳穴の快感中枢を瞬く間に開発していってしまう。
「あむぅぅぅぅっ、んじゅぽっ、じゅぽちゅぽっ、ちゅぽぉっっ!!　んじゅるぅぅぅ〜〜〜〜〜っっ、じゅるるるっ、くちゅっ、くちゅぷっ、れろぉぉんっ……」
「ひぐぅぅぅぅっっっ!?　おひりっっ、そぇらめぇぇっっっ！　おぐっ、溶けるっっ！　絢音さんの、口ぃぃっ、しゅごっっ……あおぉっっ、セックス、ひたいのにぃっ……」
　舐められる粘膜から電流のような快感が迸り、背筋とペニスを交互に突き抜け、緩まされた括約筋は、精の放出を一秒たりとも我慢できないほど、ドロドロに蕩かされた。
「あぁぁっっ、したいっ、させてぇぇっっ、絢音さんとセックスしたいですぅっっ！　イクッッ、イグぅぅっっっ！　あぁっ、出るっ、出ちゃいますっ、お尻で出るぅぅっ！」
　痺れた背筋がゾクゾクゾクッと跳ね上がり、射精準備に入った睾丸がせり上がって、肉棒が根元から暴れるように躍動する。尻房を突き上げてお尻の穴を舐め回され――弛緩した括約筋が、堰き止めていた牡欲の迸りを一気に解放へと導いた。

――ドグドグドグッッッ、ドビュルゥゥゥ〜〜〜〜〜〜〜ッッッ！　ビクビクッッ、ビュグゥゥッ、ドプゥゥゥッ、ゴプッッッ！　ビュグッッ、ドプッ、ドブゥッ……

「〜〜〜〜〜〜っっ♥　んじゅっっ、ちゅぽぉぉっ……んっ、れてりゅぅ……紀人くんの濃ぉいのぉ……おぁひゃんの手マ〇コ、まっひろぉ……んじゅるっ、じゅぶぅ……」

「あうぅぅっっっ、膣内射精っ、してるっ！　してますっ……絢音さんとセックス、してるっ、してないのにっ……膣内射精ぃぃぃっっ!!　はぁぁっっ、さ、させてぇぇ……」

言葉で煽られ扱かれるたびに、視界に火花が飛び散って、ペニスが快感で弾けているようだった。片手が搾乳するように、紀人の牡ミルクをゴシゴシと扱きだして、もう片方の手は皿になって亀頭を包み、排泄されるザーメンを掬い上げて搦め捕る。握り潰された精液は手の中で粘糸を引き、それを亀頭に塗りつけられ、さらなる射精欲求を誘われた。最後のダメ押しに肛門へのディープキスを受けると、それだけで尿道が全開になって精液が流れだし、手コキに導かれて、だらしなくビュルビュルと白濁を迸らせてしまう。

「じゅるるるるぅぅっっっ、ぐちゅぷっっ、ちゅっぶぅぅっっっ……んれりゅっっ、れろぉぉぉ……んっふふふ、あはぁぁ……まら、こぉんなに……ほぁあ、れ〜んぶ射精ひちゃいなひゃい♥　んじゅれろぉぉっっ、ぐちゅっっ、れろぉっっ、んっふぇ……えおぉぉぉんっ……」

肛門へのキスだけでなく、睾丸にまで舌を這わせ、優しく唇に含み、コロコロと舐め回して刺激を与えてくる。感じたこともない甘い刺激に、情けなくアッアッと声を震わせながら、紀人は命じられるままにペニスを跳ねさせ、残った精液をすべて、絢音の手の平へ

と捧げ、搾りだしていった。
「んふぅ……ぷぁっ、すごいわねぇ、こんなにドロドロなの……見るのも久しぶりだわ。味見しちゃおっと♪　んっ、ちゅ……じゅるっ、ぐちゅっ、ぷちゅっ……っっ♪」
（うっ、あぁぁぁ……なんっ、だ……いまの音っ、まさか……くふぅうっっ……）
まさか――と思っても、その想像を振り払うことはできなかった。絢音の肉厚リップが、吐きだされたばかりの精液を啜り、口内で噛み潰してグチュグチュと攪拌し、ザーメンを試食しているのだと、脳が勝手に解釈してしまい、射精を終えたばかりのペニスがまたしても、ドクドクと脈打って硬さを取り戻してゆく。
「とぉっても濃いわぁ、味も臭いも……熱々の、生臭ザーメン♥　お口に絡みついて、プチュプチュ潰れてぇ……あっ、んぅっ……こんなの、膣内射精されたら……本気で妊娠しちゃいそ……あらあら、紀人くんったら。精液飲まれるの、そんなに興奮した？」
（や、やっぱりだっ……絢音さんが、僕のぉっ……くっ、あぁぁっ！）
ニチャリと粘液に塗れた感触を伝わせて、再び絢音の手が紀人の勃起ペニスを掴み、真下どころか股の間を通るように、背後に向けて引っ張った。肉棒の根元から前立腺まで刺激を走らせて、引っ張られた牡槍がビクッと跳ねる。それを絢音の唇が柔らかく包み込み、巻きつくように舌を絡めて、チュパチュパと吸いしゃぶりだした。
「んはうぅうっっ！　あ、絢音さっ……んぁっ、あっはぁぁぁ……っ……」
「んちゅ、ちゅぷっ、じゅぱぁぁ……んふぅ、どうしたのぉ、そんな声だしちゃって……

お掃除フェラも、初めてだからかしらぁ……んっ、ちゅぽぉ……」
引っ張られた肉棒が柔らかな粘膜に包まれ、たっぷりの唾液で洗われ、舌に汚れをこそぎ落とされてゆく。丁寧に這い回る粘膜塊の感触に尻穴がヒクつき、四肢がガクガクと震えて、全部吐きだしたはずの尿道から、最後の一滴分までが搾り取られてしまった。
（ふぐっっ……うぅぅぅっ……ぜん、ぶっ……す、吸われっ……はぁぁっ……）
「んぐじゅぅぅぅっ……じゅるるるっ、ちゅぽっ、じゅるぉぉっ……んっ、ぷぁっ」
最後にひと際強く吸い上げられ、ようやくペニスが解放される。あまりの快感に緩んだ膝が脚を大きく開かせ、お尻を大きく背後に突きださせた。まるで絢音に対して完全に屈服してしまったような、無防備な牡を曝けだす体勢になってしまう。
それを眺めて絢音はニコニコと微笑み、勃起した肉棒をまた下に向けさせて、フーフーとアナルに息を吹きかけながら、紀人に語りかけた。
「どうだった、紀人くん……私の手マ〇コ、気持ちよくピュッピュできた？」
「あふっ……は、はいっ……めちゃくちゃ、気持ちよかったぁ……ですっ……」
下半身と声をひたすら震えさせた情けない格好で、紀人は蕩けた声を吐きもらす。
（あ、あぁぁ……本当に、気持ちよかった……けどぉ……ひ、陽菜に、どんな顔をすればいいのか……んくぁっ、あぁっ……）
快感と申し訳なさに呻きながら、なおも肉棒を擦られて精液を吐き、下半身をガクガクと震えさせる。頭の奥にはまだ、彼女の秘唇を味わう妄想がこびりついているほどだ。

表情だけは微笑ませて顔を上げ、陽菜に口づけると、そのまま腰を引いて肉棒を抜き、そこから亀頭の先端を上向かせる腰遣いで、勢いよく陽菜の膣肉を掻き回す。

――ズッジュウゥゥゥッッ……グチュンッッ、ズブッッ、グチュゥゥッ！

「んっくぅぅぅっっ、ひあぁぁぁんっっ♥　あっ、はぁぁっ……んぃっ、ひぃっ、いひぁぁぁっっ！　紀人くんっ、すごっ……んぁっ、はひぃぃぃっっ！」

挿入し、奥まで亀頭を突き入れるよう深く腰を叩きつけながら、亀頭の傘では必死にGスポットを探し、そこを重点的に擦り上げた。蕩けた媚肉に肉棒をしゃぶらせ、包皮を引かれて扱かれる快感に腰を跳ねさせ、膝をガクガクと揺らしても、肛門の力だけは緩ませずキツく締めつけて、激しく膣肉を貪る。

「んぐっっ、あぁっ、はぁぁぁっ……ふくっ、くぉっ、おぉおぉっっ……」

特濃の牝蜜を溜め込んだ蕩肉の味は、僅かに擦れるだけでペニスと理性を舐め溶かし、奥へ向かえば向かうほど、柔らかく包み込んで精液を啜り上げようとしていた。しかも膣襞は熱々に絡みつき、一度挿入すると、引き抜くだけでもかなり精神力を削られる。このまま挿れておきたい、最奥に思いきり精を放ちたいと、獣欲塗れの願望が込み上げるが、なんとか押し殺して懸命に腰を振る。

「ふぁぅぅっ！　あんっ、あっ……んんぅぅっ！　いいっ、紀人くぅんっ！」

陽菜の嬌声を聞きながら、一度、二度、三度――それから数回の抽挿を繰り返すだけで、頭が真っ白になるほど気持ちがよかった。射精をこらえながら、ということを差し引いて

も、腰の速度は緩くなってしまい、引き抜く瞬間は名残惜しさが、そしてすぐに再挿入したいという欲求が湧き上がる。次第に離れがたくなった牝壺の味に誘惑され、紀人のストロークは短くなり、やがてはGスポットを刺激することもままならないほど、深くに肉棒を突き立てて、短い範囲での小刻みな抽挿を繰り返していた。

「んはぁぁっっ♥　あひっ、ひぁぁっっ！　のぃとっ、きゅっ……きゅふぅぅんっ！」

甘く名前を呼んで抱きつき、陽菜が両手両足で紀人の身体を拘束する。無意識なのか、そのまま下から腰を使われて意識しない膣快感を注ぎ返され、紀人は背筋をゾクゾクと痺れさせて、頭を真っ白にし、もはやこらえきれない絶頂に向かって、ひたすら走る。

（はぁっ、あぐっっ……あぁっ、イクッ……こんなの、絶対イクぅぅぅっ！）

奥まで深く突き入れた状態で、四肢にガッチリと身体を押さえつけられた。腰は引くことを許されず、いやらしい蠢動を繰り返す子宮口に亀頭を密着させられ、その収縮にひたすら裏筋を舐め上げられる。ゾクゾクッと快感が走り抜けるのに合わせて、彼女の膣襞が肉幹を甘噛みし、ゆっくりと快楽の味を染み込ませてきた。

「のりっ、と……くぅぅぅんっ♥　エッチ、すごいっ、すっごぉいっっ♥　んぁっ、んくぅぅっ！　もっともっとぉっ！　グリグリしてっ、ジュポジュポしてぇっ!!」

これが無意識なのだとしたら、本当に恐ろしい、生まれながらの淫魔のようだ。耳元で甘く訴えながら、唇は耳朶を食んで舐めしゃぶり、舌先が耳穴を犯してくる。粘膜が這い回る、ジュルジュル、ヌチュヌチュという卑猥音を最大音量で響かされ、聴覚は完全に彼

女にジャックされていた。抽挿おねだりとおしゃぶり声、それに腰を使わずともペニスを扱き抜く膣肉の肉悦、それらが促す熱い火照りが、抱きしめられる腰を溶かして尻肉を緩ませ、弛緩を括約筋にまで伝染させてゆく。

「――っっ！　ご、ごめっ……ごめんっ、陽菜ぁぁっ！　あぐっ、イクぅぅっ！」

最後の意地とばかりに、引こうとした腰を押しだして、子宮口を自分の意思でグリグリと擦り、隙間なく口づける。そのまま腰を震わせ、肉棒が膨れ上がる――と、気配を感じ取った陽菜は、抱きしめていた四肢を少し緩めると、優しい声音を耳に響かせた。

「んっっ――んぅっ、いいよっ、大丈夫っ……ちょうだい、紀人くぅんっ♥」

恋人の甘い許しに安堵さえ覚えて、紀人は脱力し、破裂する牡欲を最奥へ流し込む。

――ビュクビュクゥゥッ……ドクドクドクッッ、ドップゥゥッッ！　ビュルルッッ、ビュクビュクッッ……ビュルゥゥ～～～～ッッッ！

「ふぁっ、はっっ、あぁぁぁっ……イクッ、搾られるぅぅっ、イクぅぅっ！」

あまりに情けない蕩け声を上げての射精、けれどそれが、どうしようもなく快感だった。陽菜の手が優しく髪を掻き撫で、背中をポンポンと叩き、射精する肉棒を膣の動きだけで扱き、すべての精液を啜り上げてゆく。

「んんっ、はぁぁんっ……あっ、はぁっ……ぅんっっ♥　あっ、すごっ……すごい、元気っ……もう三回目なのにっ、熱いのトプトプッて……絡んできてるっ……んふぅぅ……」

「あぁっ、んぅっっ……ひ、陽菜ぁ……あむっ、んじゅるっ、ちゅぶぅぅ……」

恥ずかしさを隠すように口づけを求めると、即座に応じて舌を絡め、子宮口が精液を啜るのと同様に、唾液を吸い取ってくれた。そのまま髪を撫でられるのが気持ちよすぎて、数ミリほどのストロークで懸命に膣最奥を叩きながら、僅かばかりの快感を彼女にもフィードバックさせる。その分、丁寧に扱かれたペニスはさらに精を迸らせ、紀人の腰は面白いほどに躍り跳ねたのだが。

「んじゅっ、れろぉぉぉ……ぷぁっ、はぁっ……ふぅぅ……ごめん、本当にっ……」

二度も射精しておきながら、彼女を満足させられず先に果ててしまったのが、申し訳なくて仕方なかった。せめてもの償いにと頭を撫で、髪を梳き、口づけを何度も浴びせると、陽菜は嬉しそうに瞳を細め、クゥンッと子犬のように甘えた吐息をもらす。

「んぅ……どうして謝るの？　だって紀人くん、私の膣内で……すごく、気持ちよくなってくれたんだよね……こんなに……んくっ、熱いの……いっぱい射精するくらい……」

ヒクンッと肩を震わせて陽菜が問い返し、はにかんだ笑みを浮かべて見せる。

「それならね、私は嬉しい……自分の身体で、大好きな紀人くんが、いっぱい気持ちよくなってくれたんだもんっ……いま、すごく幸せだよ……ね、ギュッてして？」

「――もちろんっ……すごく気持ちよかった……陽菜、大好きだっ……」

泣きそうになった顔を隠すように抱きつき、萎えかけのペニスを抜くこともなく、肌を擦り合わせて、身体と唇を密着させる。胸元で潰れる乳房の感触が心地よく、その刺激に誘われて、挿入したままの肉棒はすぐさま、硬さを取り戻していた。

「んぁっ……ふふっ、紀人くんはおとなしいのに、こっちのコは暴れん坊さんだね♪」
「や、やめてよ……」
腰を動かされ、屹立した肉棒が舐め上げられる。快感に声を揺らしながら、紀人はまた陽菜に口づけ、ゆっくりと腰を引く。
「あっ……んっ、やぁっ……抜かないで、紀人くぅんっ……」
「わかってるって――くっ、おっ……くぅぅっ！　うぅぅんっ！」
恋人の愛情に応えようと、再び抽挿を始めると、ビクンッと背筋を反らして全身をわななかせた陽菜が、淫らな微笑みを見せて、唇を開いた。
「ふぁうぅっ……あんっ、あっ、はぁっ……すっごい、元気だぁっ……」
「当たり前だよっ……陽菜のオマ〇コ、本当に気持ちいいんだからさっ……このまま、もっといっぱいするからねっ……陽菜のことも、気持ちよくしてあげるからっ！」
頬に、首筋に、それから少し身体をずらして乳房にも、キスを浴びせながらそう告げて、紀人は激しく腰を振る。グチュグチュと、自分の精液と陽菜の愛液を膣壺の中で徹底的に混ぜ合わせて、濃厚なシロップのように作り変えると、それを膣襞へ擦りつけてゆく。
（ぁ――や、ばいっ……いまさらだけど、僕っ……思いっきり膣内にっ……）
絢音は生でのセックスと膣内射精を所望し、薬で避妊をしていたのだが、いまさらながら、避妊具をしていなかったことに気がついた。
一瞬の躊躇、そして逡巡――けれど、目の前で微笑む少女の顔を見て、紀人はすぐさま

考え直し、覚悟を決める。彼女がこれほど愛しいなら、ここで妊娠してもしなくても、責任は取るに決まっていた。訝しむような視線になった陽菜に、なんでもないよと首を振って応え、大きく腰を引き、そこから一気に奥まで貫く。

「んぁううぅぅぅっっ！　んふぅっ、あっ、すっ……ごいっ、あっっ……んっ、ねぇっ……紀人くんっ、お願いっ……聞いて、お願いあるのぉっ……」

身悶えながら、甘い声音で訴える陽菜。先を促すと、膣肉を擦られ腰を跳ね上げながら、少女は真っ赤になった表情を蕩けさせて、熱い吐息とともに言葉をもらす。

「しゃ、せいっ……我慢、しないでねっ……イキたくなったら、そのまま奥に……ぜ～んぶ射精しちゃってほしいの、お願い……ふくっ、あっ……んぁぁっっ！」

「だけど、陽菜……んぅっ、ちゅっ……んっ、ぷふぅっ……陽菜？」

さすがに次からは抜こうと思っていたから、先のリスクのことも考えて告げようとしたが、その言葉はキスで遮られた。唇を甘噛みされ、舐め上げられ――そしてゆっくりと離れた彼女の口が、いやらしく紀人の牡欲を誘惑する。

「欲しいのっ……射精されるの、すっごくよかったからぁ……今日の紀人くんの、全部私がもらっちゃう……ママに取られたくないもんっ、ほら、頑張って♥」

「そんなっ……い、言われなくても、もう絢音さんには――って、ちょ、ちょっと！」

戸惑う紀人の返事も待たず、陽菜がイタズラっぽく唇を緩めて、腰を浮かし、前後に揺すってペニスを扱き始めた。同時に甘えるように首筋に抱きついて、チュッチュッと音高

く耳に口づけながら、抽挿おねだりをささやきかけてくる。

「ほらぁ……んくぅっ、あんっ……はぁっ、いっぱい、ゴリゴリしてっ……力任せにしていいからぁっ！　私のこと、使って……ビュ～ッて、いっぱい射精してっ、お願い♥　ねっ、紀人くんも、腰振ってぇ……あんっ、くふっ、ふぁぁぁっ……あぁぁっ……」

抱きしめられ、小さな手が背中を妖しく撫でる、その感触に尾てい骨の辺りがゾクゾクッと痺れた。同時に豊乳が押し潰されて胸をくすぐり、心地よさにペニスが反応する。煽られて腰を叩きつけると、陽菜が思いきり背を反らせ、頭を跳ねさせて白い喉を晒した。

「んくっふぅぅぅぅっっ♥　あはぁっ、はぁっ……んんぅぅっ！　のり、とっ、くぅんっ……あんっ、ふぁぁっ！　それ、もう一回ぃっ……あぐっっ、おうぅぅんっっ！」

子宮口を小突かれる衝撃に、彼女の頭は激しく振り乱され、髪から甘い香りを、そして額から大粒の汗を振り撒く。その香りに官能をくすぐられ、思わず唇を寄せて汗を啜り、小刻みに腰を振って、彼女の肌の味と膣肉の味を、同時に堪能する。

「きゃふっっ、ふにゅぅぅぅっっ！　んぅっっ、はぁっ、くしゅぐっ……あうぅっ、くぁぁんっっ！　はぁっ、紀人くんっ、のぉっ……エッチぃっ、そんな、ペロペロぉっ、あひぃぃっ！　いはっ、はぁっ……んんぅぅっ、くあぁぁっ……」

先ほどと同じく、四肢に力がこもって身体をロックされた。しかし紀人が口づけると陽菜も安堵するのか、舌を絡ませて丁寧に肌をしゃぶってやると、ロックが緩んで抽挿の隙間が作られる。その狭いスペースで小刻みな抽挿を繰り返し、蕩けた子宮をしっかりと叩

き、それでいて、周辺の膣襞も丁寧に引っ掻き、捏ね擦ってゆく。
「んぁっ、くあぁっっ、あはぁぁんっっ♥　ふやぁっ、あうっ、んんぅっっ！　紀人くんっ、いいっ、あぁっっ、いいのぉおっっ！　してっ、いっぱいしてぇぇっ！」
（っ……すっごい、あの陽菜がっ……こんな、エッチな声だしてっ……僕ので、イキそうになってるっ……頑張らないとっ、絶対イカせてあげないとっ……）
甲高く響く嬌声に、彼女を感じさせているという悦びが込み上げ、前立腺がたまらなく疼いてくる。這い上がる快感の痺れに、射精が間近な感覚を覚えると同時、肉棒がビクンッと跳ね上がり、一回り膨らんで膣肉を圧迫した。それを敏感に察知した陽菜が、甘えた声をもらしながら、紀人の耳にささやき続ける。
「ちょうっ、らぁぁいっっ！　我慢しちゃ、だめぇぇっ♥　全部っ、紀人くんのは、ぜぇんぶぅっ……私の、なんだからぁっ！　あぅっ、んふぅぅっっっ！」
「陽菜っ……陽菜っ、あぁっ、陽菜ぁぁっ！　わかったよっ、だすっ、だすからねっ！」
母親に彼氏を取られまいと、健気に誘惑するいじらしさに愛しさが爆発した紀人は、全身で彼女を組み伏せて身体を固定し、パンパンッと激しい打擲音を響かせて、ひたすら腰を打ち込みまくる。湿った肌のぶつかる音、肉の弾む柔らかな感触、そして粘液の泡立つ卑猥な水音、甘酸っぱく広がる恥ずかしい臭気――すべてに肉欲をそそられ、快楽の波に頭の奥まで蕩けさせられた。一匹の獣となった紀人は全力で恋人をベッドに押しつけ、抱きしめ、固定した牝穴に肉棒を強烈に打ちつけてゆく。

――ズブッチュゥゥッッッッ!!　グプッッ、バツンッッ、ジュボッ、ヌッチョォォッ…
…グジュッッ、ジュプゥゥッ！　チュボッ、グプジュゥゥッッ！
抽挿を受けた陽菜は、身も世もなく喘ぎ叫び、紀人を抱きしめて腰を捩り、首筋に激しくキスを浴びせていた。言葉も呂律が回らなくなり、それでいて甲高く甘い響きを孕む。
「んっあぁぁぁっっっっっ!!　あぁぁぁっ、ダメッッ、ダメダメダメェェッッ♥　紀人くんっ、変っ、わらし変になりゅぅぅっっ、いひぁぁぁ――っっっ♥」
大量の愛液を掻きだし、鮮血と混ざった愛液染みをシーツに流して、膣壺を掻き回す腰遣いに、陽菜が全身を痙攣させて声高に叫んだ。同時に背中が反り返り、腰が突き上げられ、膝がガクガクと激しく揺れている。明らかな変化、何度か経験のある膣の収縮と、声音の乱れ――陽菜の絶頂気配を感じ取り、自身の限界も迎えていた。
「いっ……いいよっ、なって、変にっ……僕も、もうっっ、くあぁぁぁっっ！」
ゾクゾクッと背中が震え上がると同時、彼女の腰を抱いて自分の股間を押しだし、蕩襞の渦に肉棒を深く突き刺す。込み上げた牡欲はこらえることもなく、擦りつけた子宮口の奥目がけて、一滴も余さず注ぎ込もうと、そのまま解放させた――。
「んきゅっっっ……ふやぁぁぁぁっっっ♥　らめっ、イクッッ、くぅぅぅんっ♥」
「僕もイクぅぅぅっっ！　あぁっ、んっくあぁぁっっ！」
――ビュクビュクドビュルゥ～～～～～～ッッッ！　ビュクビクンッッ、ビュウッッ、ビュルゥゥ～～～～～ッ！　ビュグウッッ、ドプッッ、ゴップゥゥッッ……

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!